木村 晶子　　*KIMURA Akiko*

勝方＝稲福恵子先生を送ることば

Farewell Message for Professor Katsukata=Inafuku Keiko

人生には貴重な出会いがある。それほど多くの時間を共に過ごせなくても、その方の存在がかけがえのないものとして心に刻まれるような出会いが。勝方先生（と本稿では呼ばせていただく）は、私にとってそのような方である。

勝方先生との最初の出会いは、かなり昔、二十数年前に遡る。その頃、私はいくつかの大学で非常勤講師として英語を教えており、日本大学芸術学部もそのひとつだった。知人の紹介で採用していただいた際に、三人ほどの専任の先生方と面談があった。勝方先生はその中の唯一の女性で、柔らかな物腰でありながら凛とした気品があって、私は、なんて素敵な先生だろうと思った。特に先生の声に魅了された。どこか音楽的な響きのある低くて記憶に残る声。雑談の中で、勝方先生が学生に非常に人気があり、相談も受けていると聞き、納得したのを覚えている。

当時の私は育児に必死で、細々と文学研究と辞書の仕事（内職という言葉がぴったりだった）を続け、専任などは夢のまた夢だと考えていた。というのも、博士課程在学中に結婚したことで、大学院の恩師に「君には失望した」と言われており、その上二人も子供をもって、研究者としての未来があるとは思えなかったからである。周りを見ても、専任職を得た先輩は未婚で、既婚者の先輩は非常勤という構図だった。キャリアか家庭の二者択一が女性研究者にとってはまだ普通の時代で、子供をもつ女性専任教員は例外的だった。初代ジェンダー研究所長の小林富久子先生も勝方先生もそうした数少ない貴重な存在だったことになる。

日大芸術学部では、出講日の違いもあって勝方先生とお話しする機会はあま

りなく、ほどなく先生が早稲田大学に移られたと聞いた。芸術学部は自由な校風で楽しかったが、江古田から埼玉県の航空公園にキャンパスが移り、片道二時間近くかかるようになってしまった。他の勤務先もすべて遠く、非常勤では保育園も不可だったので、手を尽くして下の子をあちこちに預けながら、上の子を幼稚園に通わせていた。高額の民間託児所に預けた曜日は赤字だった。何よりも毎日同じ場所に通勤できたらと願うようになり、専任職を探すことにした。

たまたまその年に早稲田大学教育学部が英国小説の専門教員を公募していたが、早稲田は既婚女性の専任はとらないという風評があり（勝方先生は既婚者だが、特別な存在だった）、応募すべきかどうか迷っていた。意を決して勝方先生にお電話してご相談したところ、学部が違うのでわからないけれどとにかく応募してみたらと言ってくださった。今思えば、法学部所属の勝方先生に教育学部の人事などわからなくて当然だったが、先生はとても親切に励ましてくださった。あの時、勝方先生の温かいご助言がなかったら、私は風評を信じて応募しなかったかもしれない。感謝に堪えない。

晴れて専任教員となって、ありがたいことに先生とのご縁が復活した。勝方先生は既に女性学を教えていらして、大いに啓発された。研究室には、先生をいかにも慕っている学生さんたちが出入りしていた。その後、小林先生がジェンダー研究所を作られることになり、勝方先生が中心メンバーとなって、私は会計のお手伝いをすることになった。創成期の研究所は活気に満ちていたが、やがて国際教養学部に移られた勝方先生は沖縄学のご研究やお仕事で非常に忙しくなられ、私も専門分野の仕事や校務でゆとりがなくなってしまう。お会いできる機会も減ってしまったが、たまにキャンパスでばったりお会いすると、いつも親しくお話してくださった。

最終講義も仕事で伺えずに失礼してしまったが、近年は私も個人的に沖縄と結びつきができて、勝方先生のお仕事の社会的意義と深い意味を痛感するようになっている。沖縄という空間からでなければ見えないものがあることも。

感謝を込めて、ますますのご活躍を心からお祈りしたい。